

# 2025 学校評価

---

「自己評価」

(2026/2/4)

サミットアカデミーセカンダリースクール長野

## 《学校評価について》

サミットアカデミーセカンダリースクール長野および、サミットアカデミーエレメンタリースクール長野では、両校が掲げる教育理念および目指す理想像の実現に向けて、日々の教育活動や学校運営の在り方を振り返り、成果と課題を明らかにすることを目的として、以下の内容で学校評価を実施する。

### I 目指す学校像

教育理念「自由と愛」のもと、児童・生徒一人ひとりが、それぞれの個性が尊重され楽しく充実した学校生活を送ることを通して、日本人としての資質とグローバルに活躍できるマインドとスキルを兼ね備え、世界の舞台で自分らしく地球に貢献できる人材となることのできる教育環境の整備を積極的に推進する。

### II 重点目標

1. 児童・生徒が主体的に学ぶことができる魅力ある授業を提供できるよう教科指導法の研鑽に努める。
2. 児童・生徒が英語 4 技能（聞く、話す、読む、書く）を習得することができる環境と方策を用意し実践する。
3. 児童・生徒一人ひとりがお互いの個性を認め合い、尊重し合い、高め合える学級や学年・学校をつくる。
4. 児童・生徒が心身ともに健康で明るい学校生活を送れるよう、一人ひとりの人権を尊重し、安心・安全な学校づくりを進める。
5. 学校の教育活動等の情報を、児童の保護者、本校の志願者、地域に対し幅広く発信し、地域社会に貢献できる学校づくりを推進する。

### III 学校評価の目的

サミットアカデミーが目指す学校像と重点目標の実現を図るために、学校評価を行う。もとより学校評価の目的は「学校運営の改善と発展を目指すことにより、教育水準の向上と保証を図る」ことにあり、「学校評価を行うことによって、児童・生徒がより良い学校生活を送ることができるようにする」ことが求められる。具体的には以下の3点を目的として実施する。

1. 自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
2. 自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
3. 学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講じることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

### IV 学校評価の形態

学校評価を有効的・機能的に推進するために、実施手法として「自己評価」と「学校関係者

評価」を行う。また、必要に応じて保護者や児童生徒を対象にしたアンケートを実施して、自己評価や学校関係者評価の資料として活用することで、より精度の高い学校評価を行う。

#### 1 自己評価

校長のリーダーシップの下で、全教職員が参加し、設定した目標や具体的計画等に照らして、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価を行う。

#### 2 学校関係者評価

学校評議員、保護者や地域住民の代表その他の学校関係者が、学校の教育活動の観察や意見交換等を通じて、自己評価の結果について評価することを基本として行う。

### V 自己評価の方法

全 10 項目について、教職員からの 4 段階評価とその根拠や改善点のレポートをもとに、学校としての評価をまとめている。4 段階評価は以下の基準に基づいている。

- A：計画的・継続的に取り組み、工夫や改善を重ねることができた。児童生徒の変化や成果が見られた。
- B：概ね取り組むことができた。一定の成果はあったが、改善の余地もある。
- C：意識はしていたが、十分な取組には至らなかった。今後の課題が明確である。
- D：十分に取り組むことができなかった、または課題が大きく残った。

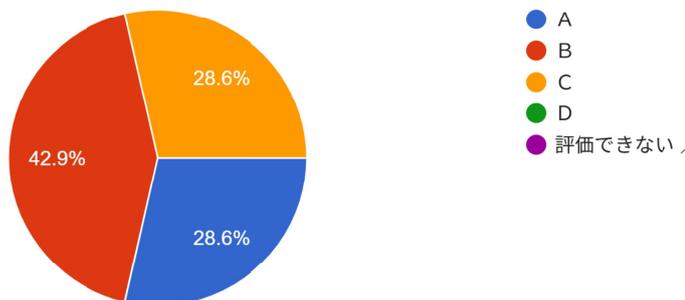
なお、今年度は自己評価の参考資料とするため、教職員による自己評価の前に、保護者アンケートを実施している。

## 《2025年度 自己評価》

### 1 学ぶ意欲・主体性

児童生徒の学ぶ意欲を引き出す工夫を行い、主体的に取り組む態度を育む授業を行うことができたか。

【評価】 < B >



#### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

本年度は、生徒が自分のペースで主体的に学習に取り組める環境づくりを意識して授業を行ってきた。その結果、授業中に自ら発言したり、課題に積極的に取り組んだりする生徒が増えてきた。授業の導入では、単元に関連する豆知識や興味を引く情報を提示し、学習の意義や考える視点を示すことで、生徒の知的好奇心を高めることができた。また、保健体育や道徳の授業では、課題解決型の学習や社会的・国際的視野を意識した題材を取り入れ、学習内容を実生活と結び付けて捉えられるよう工夫した。

特に英語の授業では、「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく育成することを意識し、スピードデート会話や情報伝達ゲーム、パートナーインタビューなどの活動を通して、生徒の自律性や協働性を促した。授業内では「Try Try Try Again」という学習モットーを掲げ、失敗を恐れず挑戦する姿勢の育成を大切にしてきた。

一方で、活動の一部には準備やねらいが十分でないものもあり、受動的な学習にとどまる場面が見られた。今後は、授業設計や教材研究をより丁寧に行い、学習の目的を明確にしたうえで、生徒が主体的に関われる授業改善を進めていく必要がある。

#### 【課題と改善点】

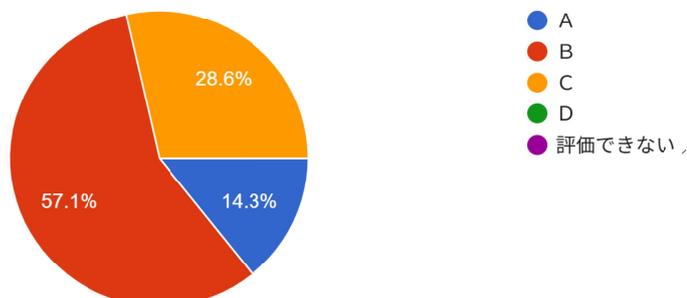
8年生（中学2年生）では、グループ活動において学習と直接関係のない話題に逸れてしまう場面が見られ、活動の進め方や学習への集中を維持するための指導上の工夫が課題となっている。一方、7年生（中学1年生）では、内容理解が十分でない場合に学習意欲が低下しやすく、意欲を保ちながら粘り強く学習に取り組む姿勢を育てる指導が求められる。

現状では、教師側から問題や単元のテーマを提示する場面が多く、生徒自身が課題を設定する機会が十分とは言えない。そのため、授業導入において「なぜ」「どうして」といった問いを工夫し、生徒が主体的に問題意識を持てる授業展開が必要である。特に数学では、基礎的な知識・技能の定着不足が学習意欲の低下につながる場面が見られることから、段階的で分かりやすい課題設定や、個々の理解に応じた支援が重要である。加えて、適切なフィードバックを継続し、生徒が自ら学習を振り返り、主体的に取り組めるよう支援していく必要がある。

## 2 思考力・表現力等

問題発見力・課題解決力・表現力・コミュニケーション能力の育成を意識した授業を展開できたか。

【評価】 < B >



### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

今年度は、グループ活動を多く取り入れ、生徒が互いに考えをアウトプットすることを意識させることで、コミュニケーションを通して自身の学習を整理できるようになってきた。グループでのプレゼンテーション作成や SA テストにおける演劇活動など、表現力やコミュニケーション能力の向上を意識した活動を実施した結果、発表や意見交換の場面において、生徒の積極性が高まっていることが確認できた。また、授業導入時にコミュニケーションを促す活動を取り入れることで、学習への関心や意欲を喚起する工夫も行った。

一方で、問題発見力や課題解決力の向上に直結する学習活動は十分とは言えない。知識や技能を活用して取り組む課題を提示することで、生徒が必要な知識を考えながら学習する姿は見られたものの、課題解決の過程や根拠を整理し、説明する機会をさらに充実させる必要がある。グループ学習や相談の時間を通して、コミュニケーション能力や論理的表現力の一定の向上は見られたが、問題を自ら発見し解決へと導く力を育成するためには、より計画的な学習設計が今後の課題である。

全体として、生徒のコミュニケーション力や表現力は向上しつつあるが、学習を通して自ら課題を発見し解決する力の育成をさらに意識した授業展開が求められる。

### 【課題と改善点】

現在の授業では、問題発見の場面において教師が課題を提示することが多く、生徒自身が前提条件や状況から課題を見いだす活動が十分とは言えない。そのため、生徒の問題発見力をさらに高めるための工夫が必要である。また、課題解決に向けて学習内容をクラスメイトに説明する機会は設けているものの、学んだ内容を活用してレポートや発表等で体系的に表現する活動が不足しており、表現力の育成についても課題が残っている。

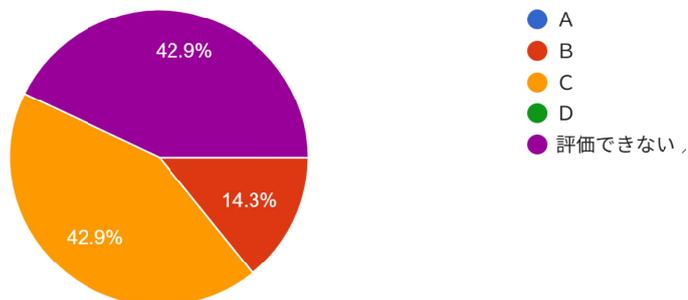
直近では、全国学力・学習状況調査の過去問を活用し、問題の傾向分析を授業設計に取り入れる試みを行っている。あわせて、授業導入時にコミュニケーションを促す活動を取り入れることで、グループ学習が円滑に進む効果も見られている。今後もこうした効果的な手法を継続的に取り入れ、生徒の学習への主体的な関与を一層促進していきたい。

さらに、個々の生徒の技能差に応じた活動の工夫や、日常の学校生活に生かせる学びであることを意識付ける指導を行うことで、生徒一人ひとりの力をより伸ばせるよう支援していく必要がある。また、道徳や HR の時間を活用し、問題発見・課題解決力を育む活動も少しずつ取り入れ、主体的な学びを引き出す指導を継続していく必要がある。今後は、授業展開と評価・指導の一体化を意識し、問題発見力・課題解決力・表現力をバランスよく育成する授業づくりを目指していく。

### 3 英語 4 技能

英語 4 技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく育成するための学習機会を意識的に用意できたか。

【評価】 < C >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

日常のあいさつや簡単な会話を英語で行うなど、授業外の場面においても英語を意識的に取り入れ、生徒が日常生活の中で英語に触れる機会を継続的に設けてきた。授業では、「聞く・話す」活動を中心に、ペアワークや会話タスクを多く取り入れ、生徒が意味のあるコミュニケーションを実践できるよう工夫した。実際のやり取りを通して、英語を使うことへの抵抗感を減らし、積極的に発話しようとする姿勢の育成を目指した。

また、短文読解や指示理解、簡単な文章作成、ワークシートを活用した活動などを通して、「読む・書く」学習も授業内に取り入れ、4技能を総合的に育成することを意識した。英語モジュールや Summit Stage においては、インターナショナルティーチャーと事前に授業内容やねらいを共有することで、活動の流れを明確にし、授業が円滑に進むよう配慮した。その結果、「聞く・話す」力については、生徒が英語でやり取りする場面が増えるなど、一定の成果が見られた。一方で、「読む・書く」活動については学習量が十分とは言えず、期待される力の定着には課題が残っている。

【課題と改善点】

これまでの指導では、日常生活の中で英語を使う機会を意識的に設ける取り組みを重視してきた。その一方で、「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく育成することや、生徒が自ら考えを表現するアウトプットの機会を十分に確保できていない点が課題として残っている。また、国語科と英語科の単元内容の関連付けについても十分に意識できておらず、教科を横断した学びを通して語学理解を深める機会を十分に提供できていない現状がある。

今後は、国語科と英語科の双方で単元の内容やねらいを事前に共有し、扱う文章構成や表現、語彙の学習など、関連性の高い部分を互いの授業で活用することで、学習の連動性を高めていく必要がある。こうした横断的な指導を通して、言語の共通性や違いに気付かせ、理解をより深めていきたい。加えて、自身の英語力についても発展途上であることを自覚し、生徒への指導と並行して研修や自己研鑽に取り組むことで、指導力の向上を図り、より質の高い授業の提供を目指していく。

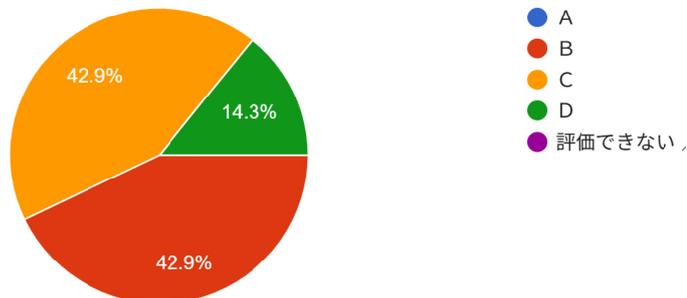
現在、生徒は英語の意味を感覚的に捉えられるようになってきているが、今後は「なぜその文法を使うのか」「なぜその語句を選ぶのか」といった理由や背景を意識させ、意図をもって英語を活用できるような指導が求められる。そのため、文法や語彙の理解と活用を結び付けた学習活動を充実させ、思考を伴った表現につなげていく必要がある。

こうした取り組みを通して、日常的な英語使用にとどまらず、思考力や表現力を伴った実践的な英語力の育成を目指すとともに、授業内でのアウトプットや表現活動の機会を計画的に増やし、生徒が自ら考え、主体的に表現する力を伸ばす授業づくりをさらに推進していきたい。

#### 4 人間関係・学級経営

児童生徒がお互いを認め合い尊重し合える関係を築ける生活指導や学級経営を行うことができたか。

【評価】 < C >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

7年生については、折に触れて「大切にしてほしいこと」をテーマに話し合う場を設け、生徒自身が考え、言葉にする機会を意識的に確保することができた。授業や活動の中では、互いの考えや意見を尊重しようとする姿勢が見られる一方で、他者と関わりながらさらに高め合おうとする意欲が十分に引き出せていない場面もあり、今後の課題であると感じている。8年生では、チーム担任としてクラス運営に関わったが、生徒一人ひとりに責任を自分事として捉えさせる指導が十分であったとは言えず、結果として責任を他者に委ねてしまう姿が見られた点については、指導の在り方を見直す必要があると反省している。

日常の指導においては、生徒が努力している姿や成長の様子を具体的に言葉で伝えて評価するとともに、課題が見られる場合には状況を整理しながら、前向きに解決できるよう支援することを心掛けた。また、気になる言動や人間関係の変化に気付いた際には、可能な限りその場で個別に声をかけ、早期対応を行うよう努めた。

グループやペア活動では、「尊重・協力・傾聴」の姿勢を大切にすることを繰り返し伝え、話し合いや問題解決ゲーム、チーム型課題などの協働的な活動を通して、互いの考えを認め合い、多様な意見に触れる経験を積ませてきた。その結果、生徒は協働的な学習に徐々に慣れ、互いを尊重しながら関わる姿が増え、クラス全体として安心して学び合える前向きな学習環境を育むことができたと考える。

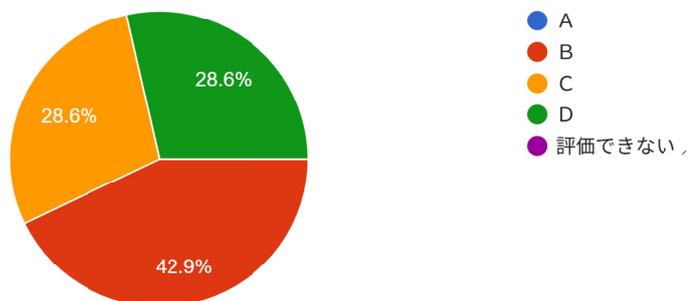
【課題と改善点】

8年生においては、人間関係に関わる問題が生じた際、対応が後手に回る場面が見られ、予防的な指導の視点を十分に機能させることができなかった。また、学級として目指す姿や成長の方向性を生徒と共有する機会が限られており、少人数で人間関係が固定化しやすい状況の中で、生徒同士が幅広く関わる機会を十分に設けることができなかった。その結果、問題発生後の事後対応に偏りがちとなり、トラブルを未然に防ぐための仕組みづくりや日常的な指導の工夫が課題として残った。

今後は、生徒一人ひとりが担任であり、同時にクラスの一員であるという意識を高められるよう、学級の実態に応じた目標やゴールを設定し、教員間で共有することで、クラス運営の質の向上を図っていく。また、日常の活動の中で互いを認め、尊重し合える関係づくりを意識し、生徒とともに「日々の生活で何を大切にするのか」を確認しながら、問題の未然防止を意識した予防的な指導を進めていく必要がある。併せて、インターナショナルティーチャーにおいても、日本の学校文化や生活習慣への理解を深めることで、学級の共通理解やビジョンを共有し、より効果的な指導につなげていきたい。

いじめ・暴力・SNSトラブル等を未然に防ぐための啓発活動や情報収集に継続的に取り組むことができたか。

【評価】 < C >



【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

本年度は、学級運営において人間関係づくりを基盤とし、生徒が互いに他者意識を持ち、相手を尊重する姿勢を育むことに重点を置いて取り組んだ。年間3回の個別面談を実施し、生徒一人ひとりの状況把握に努めるとともに、道徳の時間や帰りの時間を活用して、SNSトラブルやいじめなど、現状の課題に関する話題を適宜取り上げ、生徒の意識向上を図った。また、アンケートや啓発活動についても重要性を認識し、計画的かつ確実に実施する必要があると捉えている。

加えて、校舎内の環境整備や教員間での情報共有を徹底し、トラブルの未然防止に努めた。SNSトラブルやいじめに関する報告があった際には、迅速に対応するとともに、状況を踏まえた啓発活動を行った。さらに、最新の書籍や論文、報道等から情報収集を行い、指導内容の精度向上にも努めた。日常の授業や学習活動においては、生徒が互いの努力を認め合い、回答の正否にかかわらず尊重する姿勢を意識づけることで、寛容さや協働性の育成につなげた。

これらの取り組みにより、生徒が安心して学び、相互理解を深められる学級環境の形成に寄与する指導を行うことができたと評価できる。

【課題と改善点】

本年度は、生徒間の人間関係づくりに取り組んできたものの、すでに表出しているトラブルを収めるための具体的な手立てが十分とは言えなかった点が課題である。特に、思いやりや他者への関心が十分でない生徒が一定数見られ、基本的な挨拶や日常的な声かけの徹底を起点として、他者を思いやることの意義や具体的な行動について、段階的に考えさせていく必要がある。

また、生徒同士のトラブルを未然に防ぐための指導や、発生時の対応に関する具体的な手順が十分に整理されていなかった。今後は、様々な事例を基に対応方法を検討し、教職員間で共通理解を図ることで、組織的かつ一貫した対応ができる体制を整えていくことが求められる。

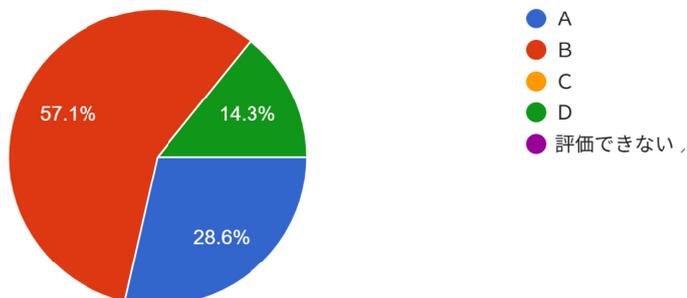
さらに、SNSトラブルについては、情報収集や事前の啓発活動が十分とは言えず、より計画的で積極的な取り組みが必要である。生徒が問題を自分ごととして捉えられるよう、題材や指導方法を工夫し、日常の指導や学級活動の中に位置づけていくことが重要である。

今後は、未然防止を重視した日常的な取り組みを通して、生徒が互いを尊重し協力できる態度を身につけられるよう、具体的な手立てや学級内ルールの整備を進め、継続的に指導していきたい。これらの取り組みにより、トラブルの減少にとどまらず、思いやりや協働性を育む学級環境の形成につなげていくことを課題改善の目標とする。

## 6 体罰・人権

体罰や暴言と受け取られかねない言動を防ぐため、人権意識を常に持って指導にあたることができたか。

【評価】 < B >



### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

本年度は、自らの言動に常に留意しながら指導にあたり、生徒一人ひとりの状況や性格を理解し、想像力を働かせた関わりを心がけてきた。強い言葉や態度が見られる生徒に対しては、その都度指導を行い、一定の改善が見られる場面もあったが、時間の経過とともに元に戻ってしまうケースもあり、継続的な対応の難しさを感じる場面もあった。一方で、常に平常心を保ち、丁寧な言葉遣いや表情に配慮することで、生徒が安心して学べる学級環境の維持に努めた。

また、物事を多角的に捉えることを意識し、生徒の行動や考え方の背景に目を向けることで、抱えている困り感を共有し、ともに課題や解決策を考える姿勢を示すことができた。加えて、生徒それぞれの良さや努力、尊敬できる点を見つけ、感謝や評価の言葉として伝えることで、互いに尊重し合う関係づくりを促してきた。

人権意識を踏まえた指導を徹底し、体罰や言葉による攻撃が生じない、安全で配慮ある学級環境の形成に一定の成果があったと考えられる。全体として概ね良好な指導が行えた一方で、今後の課題として、一度行った指導内容を定着させるための長期的なフォローや、再発防止に向けた計画的な手立てをさらに工夫していく必要がある。

### 【課題と改善点】

本年度は、言葉が十分でなかったために意図と異なる伝わり方となり、誤解を招いてしまった場面があった。こうした経験を踏まえ、今後の指導においては、表現や伝え方に常に注意を払い、失敗を次に生かしていく必要があると考えている。現状の指導方法のみでは、生徒の行動や意識の変容につなげることが難しい面もあり、より効果的な指導法の研究と改善が求められる。

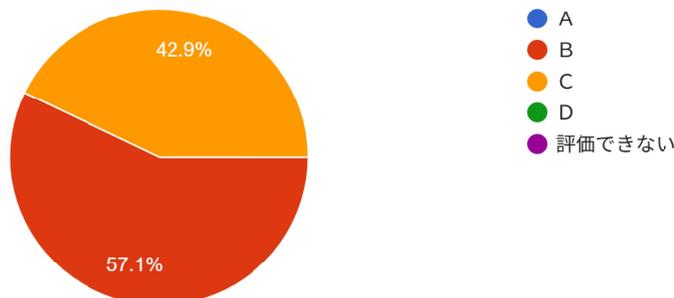
そのため、自らの学びを深めるとともに、周囲の教員と相談・共有しながら指導方法を検討し、具体的な改善策を模索していくことを今後の課題としたい。また、生徒が疑問や戸惑いを示した際には、指導の意図を正確かつ丁寧に説明することを心がけ、誤解が生じないよう適切に対応する必要がある。

今後は、研修や学習の機会を積極的に活用し、生徒理解を一層深めることで、より効果的で信頼される指導につなげていきたい。継続的な振り返りと改善を重ねながら、指導力の向上を図っていくことが求められる。

## 7 安全・防災

災害時対応、不審者・防犯対策、事故防止等について理解を深め、安全・安心な学校づくりに取り組むことができたか。

【評価】 < B >



### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

本年度は、理科や技術科における実験・実習時の事故防止や、校内での安全確保を意識した指導および管理に努めた。地震発生時には、机の下に速やかに身を隠す行動や指示の確認など、落ち着いた対応が見られ、一定の成果があった。一方で、避難経路や AED の設置場所については、十分に把握しきれていない部分もあり、今後の課題である。

日常の校内外巡視や授業観察においては、安全面・防災面・事故防止の観点から注意を払い、気づいた点については教職員間で情報共有を行い、生徒が安全で安心して学校生活を送れる環境づくりに努めた。また、教職員を対象とした心肺蘇生法および AED 講習会の実施、2 回の避難訓練（2 回目は消火訓練を併せて実施）、事故発生時を想定した救急対応訓練などを通して、災害時の適切な行動や安全意識の向上を図ることができた。

さらに、8 年生の英語授業では災害をテーマとして扱い、生徒自身が災害発生時に意識すべき点を調べ、まとめる活動を行った。日本のみならず世界各国の防災対策についても学ぶことで、生徒の防災意識を広げる機会となった。これらの取組を通して、安全・安心な学習環境の確保に一定の貢献ができたと考える。今後は、避難経路や設備の位置把握をより徹底し、迅速かつ的確な対応力の向上を図っていきたい。

### 【課題と改善点】

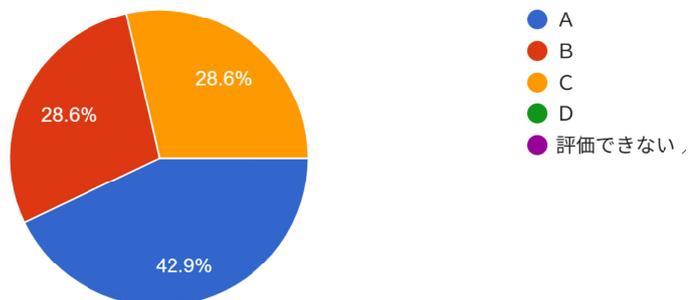
不審者対応については、フロア内に見慣れない人物（実際には保護者や来校者）がいた場合に、判断や対応に迷う場面が見られ、より適切な判断力と行動力が求められる。あわせて、災害時対応に関しても、対応の詳細や具体的な手順について教職員間での共通理解が十分とは言えず、迅速かつ的確に行動できる体制の整備が必要である。いずれも人命に関わる重要な事案であるため、避難経路や AED の設置場所を確実に把握するとともに、事故発生時の対応マニュアルを毎年見直し、教職員間での周知と共有を徹底していくことが課題である。

さらに、不審者・防犯対策や校内で想定される事故の未然防止について、生徒への周知や啓発活動をより積極的に行う必要がある。事故やトラブルが発生してから対応するのではなく、事前に生徒自身が安全意識を高められるよう、日常的な指導や学習の機会を計画的に設定することが求められる。今後は、これらの課題について理解を深めるとともに、具体的な対応策を整理・共有し、計画的に実施できる体制づくりを進めていきたい。

## 8 保護者・外部対応

保護者や外部からの相談・意見に対し、誠実かつ適切に対応・回答することができたか。

【評価】 < B >



### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

保護者からの意見や相談に対して、常に門戸を開き、誠実に耳を傾ける姿勢を大切にしてきました。個別に相談を受けた際には、その場で回答できる内容については即時に対応し、必要に応じて管理職等と連携しながら、迅速かつ丁寧な対応を心掛けた。また、健康面等で配慮を要する生徒については、ペアレンツデーや保護者懇談会を通じて直接対話の機会を設け、保護者との双方向のコミュニケーションを重視してきた。各意見や相談に対しては、可能な限り多様な手段を用い、正確かつ具体的な情報提供に努めた。

同僚との関わりにおいても、相談や意見に対して丁寧に対応し、常に生徒の最善の利益を中心に据えながら、正確で一貫した情報共有を行った。必要に応じて協力体制を構築し、対応策の確認や改善につなげることで、職員間の信頼関係の構築にも努めてきた。すべての保護者や同僚の満足を完全に得ることは難しいものの、誠意ある対応を継続することで、信頼感の醸成や相談しやすい環境づくりに一定程度貢献できたと考える。今後も、柔軟かつ適切な対応を継続するとともに、情報共有や連携をより一層強化していくことが課題であり、改善点である。

### 【課題と改善点】

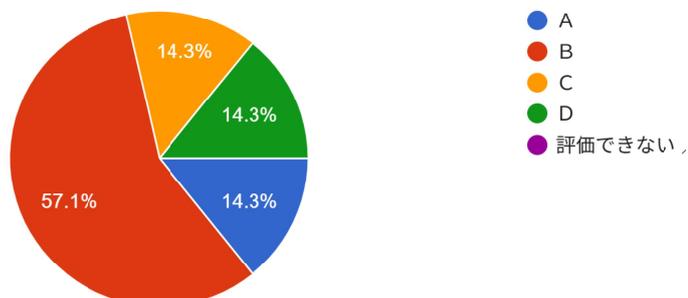
今後は、保護者への情報発信をより一層積極的に行い、学校の教育方針や教育の意図、また生徒にどのような力を育成していくのかについて、明確に伝える機会を増やしていく必要がある。保護者との連携を密にすることで、学校と家庭が協働して生徒を支える体制の強化を図りたい。また、相談や意見の中で即答が難しい内容については、速やかに確認・共有し、適切な回答を行う体制を徹底することで、信頼性の高い対応につなげていくことが課題である。今後もペアレンツデーや懇談会など、保護者と直接対話できる機会を積極的に活用し、日常的な情報共有の充実を図っていく必要がある。

加えて、外部からの要望や意見を受けて実施する活動が、学校の教育方針や特色を損なったり、生徒に不利益をもたらしたりすることのないよう、十分に配慮することも課題である。保護者とのやり取りの中で、学校内で起きた事案について自身が十分に把握していない情報を求められる場面もあったことから、教職員間での情報共有の徹底も改善点として挙げられる。今後は、事例の把握と整理を丁寧に行い、学校全体で生徒にとって最善の対応ができる体制づくりに努めるとともに、教員としての指導力・対応力の向上を図り、保護者との信頼関係のさらなる構築に努めていきたい。

## 9 地域理解・地域連携

児童生徒が地域を知り、地域とのつながりを深められる学習機会を用意することができたか。

【評価】 < B >



### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

今年度は総合的な学習の時間を通して、JR 長野駅や三輪地域の方々との交流の機会を多く設け、地域理解を深める学習活動を実施した。7 年生では地域を舞台とした学習に取り組み、生徒とともに地域を知り、学ぶ過程を通して、多様な課題意識を育むことができた。また、8 年生では協働探究と個人探究を並行して進め、職業体験や地域課題に関する活動を通して、学習段階に応じた「地域に開かれた学び」を提供することができた。生徒が地域の企業や職業について調べ、自身の関心に基づいた職業を実際に体験する機会を設けることで、学びを具体的な行動へとつなげることができた。

一方で、今年度後半にかけて 8 年生の協働探究活動が停滞し、個人探究についても、必ずしも深い学びに十分結び付いているとは言えない状況が見られた。今後は、生徒が主体的に課題を設定し、協働的に探究を進められるよう、活動内容や支援方法の工夫を継続していく必要がある。

### 【課題と改善点】

今年度の総合的な学習の時間においては、三輪地域を中心とした活動が十分に軌道に乗っているとは言えず、活動の見通しや目的について教員間で必ずしも共通理解が図られていない現状があった。今後は、総合的な学習の時間の意義や目的、手段について教員間で共通認識を持ち、来年度に向けた活動計画を計画的かつ丁寧に立てていくことが必要である。

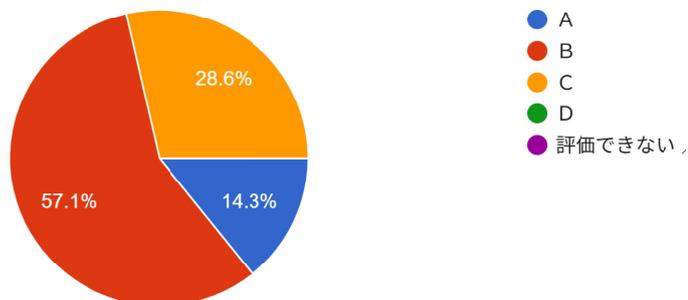
また、活動が単発的な取り組みにとどまらないよう、今年度に築いた地域や企業とのつながりを長期的な視点で生かし、継続的な関わりや新たな学習機会へと発展させていくことが求められる。情報収集を通して地域の実情や社会的な常識への理解を深めるとともに、地域や職場での学びを生徒自身が実感できるような指導の工夫が必要である。さらに、地域との関わりを通して得られた学びを日常生活や将来の学びへと結び付けられるよう、意図的な指導と振り返りの機会を計画的に設定していきたい。地域事例を活用した学習活動や体験学習を通して、知識の定着にとどまらず、実践的な力や課題解決力を育成できる学習環境の構築が今後の課題である。

加えて、職業体験においては、事前指導および事後指導が十分に徹底できなかった点が課題として挙げられる。今後は、生徒が地域や企業に貢献する意識を持って活動に取り組めるよう、目的意識を明確にした指導を行うとともに、活動の成果や課題を振り返り、次の学びにつなげる工夫を講じていきたい。生徒にとって有意義で実践的な総合的な学習の時間となるよう、教員間の協力体制や地域との連携を一層強化し、計画的かつ持続的な学習環境の整備に努めていく必要がある。

## 10 情報発信

学校・学年・学級等の情報を、保護者や地域に分かりやすく、積極的に発信することができたか。

【評価】 < B >



### 【評価の根拠（工夫・意識した点、成果）】

今年度は、保護者からの意見を踏まえ、学校での生徒の様子を伝えるだけでなく、授業の意図や学校として大切にしている教育方針など、より広い視点での情報発信を意識して取り組んだ。学級通信については、週1回の発行を継続し、生徒の学習や生活の様子を具体的に紹介することで、保護者が学校での学びを実感できるよう工夫した。また、Classiを活用して単元テストやSAテストの結果を配信するなど、各教科の学習状況を適時共有し、昨年度と比べて情報の内容および発信方法の両面で改善を図ることができた。

さらに、月1回の学校通信や保健だよりの発行を通して、学校の方針や生徒の健康状況、健康に関する情報を継続的に発信し、保護者との連携を深めた。学級懇談会も定期的を実施し、直接相談や意見交換を行う機会を設けることができた。

地域への情報発信としては、職業体験で協力いただいた企業や地域の方々に学校パンフレットを配布し、サミットアカデミーの教育活動や方針を広く周知する取り組みを行った。これにより、保護者や地域の方々に学校の取り組みへの理解を促すとともに、今後の学習活動への関心や協力につながる基盤づくりができたと考えられる。総じて、情報発信を積極的かつ明確に行うことで、保護者および地域との連携強化に一定の成果を上げることができた。

また、生徒募集に向けた取り組みとして、新たな学校ガイドを作成するとともに、学校ホームページの内容を更新した。いずれも外部業者に委託せず校内で制作することで、コストを抑えつつ、学校の特色や魅力が伝わる質の高い発信を行うことができた。

### 【課題と改善点】

今年度は、保護者や外部に向けた情報発信に取り組んできたものの、年度前半は生徒の様子を伝えることに偏り、発信の目的や意図を十分に意識できていなかった点が課題である。今後は、学級通信・各種おたより・Classiなど、それぞれの媒体で「何を」「誰に」伝えるのかを整理し、目的に応じた的確な情報発信を行う工夫が求められる。

特に学級通信は、保護者が学級の様子や教育的意図を理解するための重要な媒体であるため、内容や表現方法について教員間で共有・検討し、より分かりやすく充実したものにしていく必要がある。また、従来のおたよりや通信に加え、他の発信方法についても検討し、多様な保護者にとって理解しやすく、関心を持ってもらえる情報提供を心掛けたい。

さらに、総合的な学習の時間などを活用し、生徒の学びや探究活動を実社会とのつながりの中で示すことで、学校の取り組みを外部に発信する機会を増やしていきたい。保護者が「読みたい」「知りたい」と感じる内容を意識し、生徒の学習状況や探究の成果を積極的に発信することで、学校・家庭・地域の連携を一層深めることを今後の目標とする。